

広松渉氏の  
マルクス解釈の陥穽

桂木健次

九 大 新 聞

1971年1月25日

第623号

この「課外論」と「主体・客体」認識図式は超克と相即し成立する唯物史観・協働存在論において、カール・マルクスは初めて「人間」主体概念を「協働存在」としての類的存在「カウツクス・エンゼー」に、「社会的諸関係の主体」において「把握・定義」、内社会的な歴史内存在としての矛盾相即としての個体的 intersubjective な認識了解を提示してきたのである。氏の解釈になるマルクスの思想的な Grundfassung は、このように「課外論」から物象化による下向しと探求されたところ解れている（価値象性的な研究を待つて完全に転換）。そしてこの解は、さらに現代新左翼の課題状況に読み込まれ、分えられ、類比される。

従って、筆者は本稿では、氏のこの基礎層に関する批判的傍注をかねて、カール・マルクスの理論史（『三月号』）に關する筆者の解釈を簡示し、現代新左翼の課題状況の基礎をあらわす。本稿の編成があらかじめ随し、問題所在を明瞭にみるために、や

結論を先けて述べておけば、次の諸点がある。

一については、氏において、前期マルクスの「庶民階級」を「疎外（回復）の論理」に結絡させる政治・法律の区立て、ことによつて、▲三  
月前、一八四八年革命のドイツ問題、カール・マルクスの「Gy-  
undfassung」、そして「経」草案稿」にみられる論理の位相  
が解明、未展開に残されて、たゞ、方法論的次元で後期マルクスと  
対比・対置されて、「疎外（回復）」の論が「主体・客体・図式」  
にタブラされて批判されている。このちやん氏の論点のおおきさに  
関する問題が一つ。

二つに、それ故に、氏にあるはカルマルクの“Gatungswesen”、理解が存在論的・非法的の“Gesellschaft”, “geselligen Verkehre”, 概念の「貧困に替つてかまれることがない」)れは“Wesen”の「非法的把握」。つまり、日訳に際しては「は」は語感を覚える「存在」[「本質」]の多義問題所在(非存在)とDasein(「存在」・「定在」)の関連のつちかづいては「概念」(意識)は有(「歴史的な諸現象」)のうちに「本質を亮する」とへルルをよんだが、歴史的規定性をもつた“Dasein”、とての現象「フナメン」の“greifen”は、平たないは漢訳居氏のいわれる「人間の事

「聚会的な共同体、社会的存在の「グループ」において現象が振舞うというところであつて。つまり、「経済法則」に人間（諸個人）が被捉束であり協調・観望として個化されるというところだけだ、  
「経済法則」が「経済原則」としてあらわされた「社会成員の不可欠の根據をなすところ」の、あつちの社会・経済通な、「生産」一般（労働）そのものの根源の本質規定に被捉束關係であつたというところを、この問題である。カル・マルクスの「草薺」の Grundrissfassung は、いわれるように、疎外された人間、私利私利に殉じて、ideal な人間像」をみたのであるけれども、そこで

の「Geltungswesen」規定は、歴史的な私的所有（資本）の社会、人間存在を制約・支配し、実在する。これらは「経済学ノート」にいう社会存在（マインヴェンデ）と「ヘルルト」と同義であり、また共同存在（ゲマインシャフト）の意もある。眼前の「home」は「Joyce」に自己分教した社会（構成）（ゲルシヤフオマチオン）の人間（諸個人）は、疎外された形での私的所有の関係としての、社会的交通（セリツガ）フェルケル（人間と人間関係）であって、この実体的な土台をはなれてそれも歴史的に存在しえないといふことが、ここにある。【量】「ノート」のベルクスのGrundfassungは「指示された」の「Blickpunkt」に非無関係。

三つを以て、以上の広松氏、熊沢氏のうち、熊沢氏が外でも、広松氏の認識論に根拠をたてたところ、自己形成をたてたかによって規定される。『どのような社会的交通の場、自己形成をたてたかによって規定される』＝「本能的な共同主観性」と「応じつかまれないが、かんじられる」の「社会的交通」理解が歴史的社会の「フェノメナルな世界内構造的連関」、通説のいう「歴史的社会」の「フェノメナルな世界内構造的連関」、通説の「マルクス主義認識論」に生起超克にある。

以下、第一、二点に關して展述する。第二点に關しては、あためて解述した。

氏の初期後期マルクスの顯明的な階級概念に基づいて特徴づけられる。『課外・回復』論から『歴史内存在・物象化』論の転換まで、主たる存在事物の間に直線的に成立する客体的現象、単なる記号論的現象の間に、主たる存在事物の間に、*intersubjective* な媒介を経た成立する主語的現象の間に、主観的現象、共同主観的・即時的協働の關係・現象への転換。

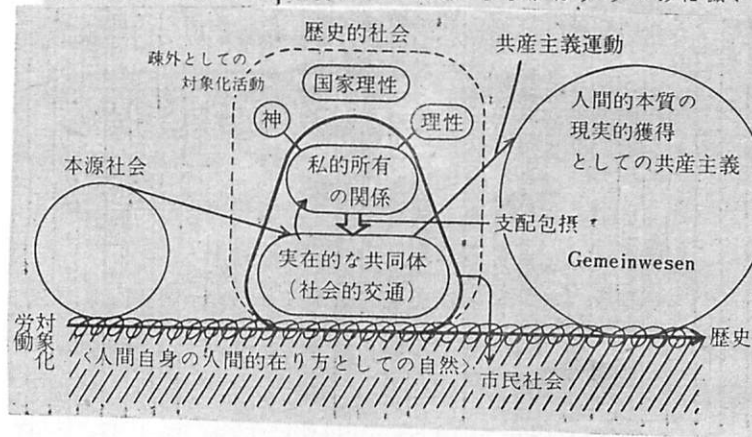
この場合、初期マルクスの「課外論は、理想と現象を逆構成する現象をもつて、本来の在り方、方から課外、理想の現象をもつて、本来の在り方への復帰、本来の回復」だまをやる「イデオロギイ」の二つの矛盾であり、「*U・イデオ*」ではこの「課外論的現象としてのイデオロギイ」の根拠が自覺され超克された。(『地獄』二四八—四九)。

はしてどうか。

[illegible]

これは、人間の變化（フエルゲートシヤンドザリシ）といふ問題と関連して、外化（エントオイゼルン）、疎外（アルガス）などのような區別不分離の同一性で、何を説明する概念として使われているから、いふところである。これを筆者の解釈としてまとめれば、次のとおりである。即ち――

人間(諸個人)は、歴史の内において、決して類的存在、共同存在としての社会的・通時的な存在・本質を自然に失しないので、疎されて人間から人間の疎外の全体に支配・包摂されて現存する(ササキ)をいふこと。このことは、政治の対象存在、類的存在である対象化活動を、宗教(教会)、政治(国家)と、抽象(観念)的外在性に実体化して、人間その社会構成(市民社会)にむかひあつて実在せしめる。疎遠な対峙の形態に、対象化活動がこのような外化・疎外に転回する」とが、人間(諸個人)が対



象と、從つて人間との關係、交通（フルホルテン・エルケール）を人間の本質的諸力の「諸體」として喪失するといふその根柢をなしている。人間の諸表現（レーベン・オイセツク）の・對象化といふ運動本質が、たゞそれとだけしか確証しな（は）ないこと。人間の抽象的現存在。人間は、己れの人間の本質、分ツツツケスウェー）としての社会的交通を、該外の内部で、社会的労働と後年表現された對象化活動が、該外・抽象的労働に転回する私的諸表現では、一時的な有用諸體」におひのものとこゝれ、外在的実在として、從つて一般的・抽象的な本質において、國家（政治）、教會（宗教）を發展させていた。人間の類的生活が、國家ならびに教會・生活で抽象的に *citoyen*（並び神の子）としての現存在を保持し、こゝれ、批判的な「*bourgeoisien*」な、國家の人間解放（止揚）なる政治的解放に實する人間の、全面的解放にして、「*独仏年誌*」に論ぜられ、マルクスがすでに積極的に開示した、ドイツ革命のヨーロッパの普遍的運動と同一展開された理論的革命へのアプローチである。Weber, I. S. 390-391 參照。

歴史現実のイデアルなひねり

類的存在——共同体——社会的交通

の具体的現存在の再認識を

ω

[illegible]



と「社会的研究」は、広松氏では「ヘーゲル系意識形態化の総合的批判」を以て、これを「解釈者の目である。けれども、氏は(1)「草稿」が、ヘスの影響下に主体概念の設定仕方において、「自然存在」という特殊フイエルバハの含意(2)「を」を残しつつ類的存在(3)「ワツツシクウゼン」を *hypostatasteen* で「存在する」とあり、従つて絶対精神を「件」の人間で「覆被する立場」(「Saibiede-Gebstanz」)に留まつたと解釈し、(4)エンリルスとの再結合に、ヘス解釈に於いて「単純転換」社会的諸関係「総体」として「テーゼ」(一八四五・春)に到着したとして、(4)人間解放に託した「真の共同体」の理想は生きたもので、それを基礎付ける「[目録外(回復)の論理]が、(4)に即し「具体的に提しなおされた。これが「下・イデ」意識での「物文化」の論理をわがものとした三極化の総合・止揚として理解されている。

カル・マルクスに対する「解釈と了解」について、その根本において批判的に再叙述であるが、この二つの次の三極化つたてや立ち入つておこう。

一つ「マルクス『草稿』」における主体概念が、いわれるように「具体化されている」といふ点、マルクスは、人間（メタヒューマン）の量的存在（カントの「グーゲン」）と使用（メタヒューマンである）が、これは「現実のナン・リンゴ・ス・エ・イチゴから」「果実」という普遍表象をつくり、自立的な「実体」として」という意図使われ、「疎外・回復の行程が『思惟』とよまれて、主体・人間」の「目」活動の具体化として解決されているのである。否、否である。筆墨は次の解釈を述べているが、高明なる諸君はいかが、即ち、フオアールバッハが「Menschenatung」か」といふ點をヘーゲル思惟批判の「real Erkenntnisbestimmung」に於いて開示した（これは「思想」Ⅶ・一の寺田勉參照）但、解釈は疑念を踏まえて、主体・疎外・転落しながら、量的存在（カントの「グーゲン」）、社会的交通（フリーリガール）をあくまでも、私的所の國民經濟的事業に定位し、疎外した形態で、外在的に、抽象的に結合した人間の關係、労働者・非労働者の關係としてつかみどり、定義している。近代産業の萌芽たる私的所の關係において、疎外されて存在する類的存在は、そのこともっとも完備として、國家の形で外部切りはなし、これにづけられた近似的市民社会（フルガリリヒエゼルス）シャフトである。マルクスは、「草稿『ノート』で、「國民經濟的事実」（交換と商業形態）の批判的・下向的分析を試みつつ（未展開・挫折した）という、國經濟学が人間共同存在（フマインウェゼン）、社会的交通（フリーリガール）を（まず）、人間「質」の「sich bestaufend」を單なる表象

「一國民生活の事實（現存性）」において理解してゐないといふことを分析しつつ、みづからの立場を明してゐる。それは耳を傾けよう。「われわれは國土經濟上の事實を出発する。労働者は、彼が富をより多く生産すればする程それだけますますになる。労働者は、商品を作り多くすればつく程、それだけ安い商品になる。事實界の価値増大（ワルツェルが直覺に比例してすむ）の価値下落（アントウエル・クルグ）が人間、労働者、消費者の間に下ろ（シフトウエル・クルグ）して生産する、しかもそれが一般に諸商品と生産と労働者とを商品として生産する、しかもそれが一般に諸商品と生産とに比例して」（第一手稿）

第二に、マルクスは「広柱のいうようには、『協働存在』『社会的関係の総体』概念を、『存在性』との対質として使用したのではない。

活動、社会的な存在としての人間關係人は、その「目的・発生的な變化化」の過程で、ウィルケンにおいて自然にちつとつ關係的存在となる。この「目的・發化的交通（Zweckmäßige Verkehr）にある」。エンゲルスは社會的交際活動の「ド・イ」のパラグラフは、「歴史の本質的關係」を生活の社会體として協同（ツサンゼン）ウィルケンに定義し、「社会的交際活動の本源關係を真正正確に表現しよう」と。Geselliger Verkehr ist Zusammenwirken. けれど過去（原始共同體）にして未來に續く理想として、現在に於いて「疎外、喪失」が存在ではない。歴史的實踐的にしかも、歴史的な生産様式、協同様式に定在しつつ發展し、當分ではその實現面面的に可能なるものとするので本論、發生的実在性を共同存在とするのである。まさしく、類的存在は、広松氏の了解しき共同存在マルサスの理念ではない。省みれば、昔川漢次郎氏が、『経済学』における「具體」と「抽象」論で、生産一般特殊歷史社會的「根本的な協同關係」、「人間のものの成立の基に支配する根本的協同關係」と並列して、現在の人間の歴史的事實を考察すれば、その理論が表記述に止まらずを得ないことを追言して達意であった（氏の『野經済学方法論』の読々々は留保）。

最後の点は、ヘスの影響をつつて、マルクスの「自然の歴史」の人間問題を超克したといふ点。類・人間は、自然の歴史でもあるといふことの意が氏はしたといふ。自然生の一意識的の存在意識に於て理解されていない。従つて、人間主義、自然主義は、広松氏において、単なる観念論から唯物論への視座転換の働いたしの評価しがうえられていない。対象活動、労働などの類の活動、この社会交通としての人間存続の基底そのものが「本源的概念が、氏は無知にある。人間の自然の、社会自然の本質的一体性。

社會的交々を人間（諸個人）の現實的存在は、市民社會（ブルガリツ）の「セルシヤット」において、貨幣を構成的機能に持つ。物とお金の關係に物化し、それに支配、包摂されるもの存立する。物の依存、從屬としての人格的個人支配。これは、前述の如くに「ノート」ミル評註のマルクスがつかまきつてゐる。この物象世界をこそ、國民經濟學者は「本質的而根源的な社會形態」と斷定し表現してゐる。國民經濟學は「私所有の事實」から出発するが、これを我々に解明せず、「私所有が現實的なやがて物象的過程」を暴露でなければ、一般の抽象的な諸「五」法則に表現する。つまり、表裏をなでつた「諸法則」を私所有の本質「課外条件と貨幣体制の本質的過渡から」*objektiven* することは、自分陳設されてゐるマルクスは「草履」で「舐れ」ている。社會的・共同的存在に對する「國民經濟學的事實」の支配の全体「課外条件と貨幣體制が、概念的・發生的に把握されなければならぬ」。ここに、カール・マルクスの「市民社會の解剖」への立ちわかれの理論核心は宿る。

「ド・イデ」で、マルクスは、すべての歴史的種族に存在した生産能力によって規定され、並規定する交配形態（フェルケル・ソール）、社会的進歩としての態度の、交配形態（フェルケル・ソール）、を定し、機械原理によって特徴的なのが、類的存在という概念が哲學的基礎をうける故にきつばとつかわれなから。人間の生産力能の普遍的発展とともに人間の普遍的交通が確立され、当会社会は、かくて、無所有の大衆（プロレタリアト）を民族のつらに同時に生出し世界的騒動において普遍的諸個人として形成する物質的前にある。この市民社会（ブルジョア）と、フェルケル・ソールを、分業（所有交通の総体的観点から、*positive*）と、*alien*、すのこ、これがドイッ革命にとつてまた必要なのである。望月清司氏（近年の研究論文に、筆者は、マルクスが「ド・イデ」で、私の所有の社会における物質的存在のフェルケルにつづけた「社会制度」（*ケルケル*・フェルケル）が、まさにこの「*bürgerliche*」支配を生み出し、物象化の完成態をうける

と、これこそ歴史に代たる市民社会であるとかまづかっている。要約して大體云ふれば、この初歩の完成後、人間商品を生み出し、生産力能の余剰の継承に立肩に普遍的交通、共同の存在として社会的交通を現時的に獲得、其結果物質的監視的前提想としての近代市民社会における、*bourgeoisie*、支配の発生、從つて労働と資本の發生的叙敘が發せられた理論問題。この市民社会に対する批判的、發生的、從つて學的的方法の糸口が、『ドイツ人』にまづかれてゐる。この點を以て、マルクスは、エンゲルスと共に、『三月前』の「問題状況を釋説して、『ドイツ革命の編輯の立場を、西歐の革命のさかへに位置づけ、近日日」に「共黨宣言」で一八四八年革命を予告するところになる。この理論問題を、ひとまず、『ドイツ人』で完了したのである。フルードン問題を外せば、『ドイツ人』はこのように、社会的組織、フェルシャフトリッス、ウェーゼン」の把握、フーチで一段と「草稿」の「ノート」よりも構成的であるけれども、一八五五年にマルクスが『経済批判』を刊行し、『資本論』の學的叙述に向う段間に比しては、未開闢をぬかれぬ、近代的な市民社会における、貨幣を構成する裂縫に關する『bourgeoisie』、支配關係、この理論対象が、『ドイツ人』でも更に再構成的に設定されたにすぎなかつた。

最後に、枚数もきた故、追記的に筆をはずせば、現在問題の根本問題は、六七以降の『資本主義マルクス』八派+革マル』を基礎として反教派派の底の淺さである。それは、理論的に、黒田寛之の苦悶とその挫折が看過され（陳外郎の現在性としてのフロ規定）てゐるだけでなく、かゝつて松本氏の哲學を顧みする。レーニンに読まれたところあるこの無意味の故に、通説の哲學的轉化により古典的労働者階級に（その黨に）依存して、八党大衆の「ドグマ」を拒守する小派系・同派系協會の『「勢説」か』、何れも小平急進主義への派かのみを解いてゐないであらう。これは、今我々の今日の「歴史のネグス」を思ふのは、筆者の迷途にすぎなかつたか。（かゝつて、けん氏は本学経済学部助手）